

地震予知研究シンポジウム (62年 1 月)

日本学術会議と地震学会の共催により 1 月 13、14 日気象庁講堂において開催。参加者 400 人。

当センターからは、防災センターによる広域観測の現状と成果 (大竹政和)、伊豆半島とその周辺の近年の地震 (石田瑞穂)、地震波の散乱と減衰に関する研究 (佐藤春夫)、地震前兆の統計 (浜田和郎)、首都圏の地震予知 (浜田和郎) の五講演が行われた。この中で浜田は「最近十年間に発生した 10 件の被害地震については、その全てに前兆現象があり、全部で 83 件にものぼっている」ことを発表した。

当シンポジウムでは新たに予知計画に加えられた基礎的研究や資料の蓄積に伴って重視されてきた統計的研究に関する発表が多かった。とりわけ今後の地震予知計画の戦略に係る内陸地震の予知に関する問題が注目された。

盛岡 (1 月 9 日)、釧路 (1 月 14 日) で強震

1 月 9 日、15 時 14 分岩手県中部宮古付近 ($39^{\circ}51'N$, $141^{\circ}47'E$, 深さ 71km) を震源とする地震があり、盛岡、大船渡で震度 5 を記録した。マグニチュードは 6.6。

続いて 1 月 14 日、北海道日高山脈北部 ($42^{\circ}32'N$, $142^{\circ}56'E$, 深さ 115km) を震源とする地震があり、釧路で震度 5 であった。マグニチュードは 6.9。

これまでに得た強震記録では前者について八戸の地盤で最大加速度 200 ガル (1 ガルとは、地球上に物体を落とした時に働く重力加速度の約千分の一)、また後者では十勝の地盤で 143 ガルであった。これらの最大加速度のデータをまとめて「強震速報」として刊行するべく資料収集を急いでいる。

昭和 62 年 1 月の関東・東海地域の地震活動

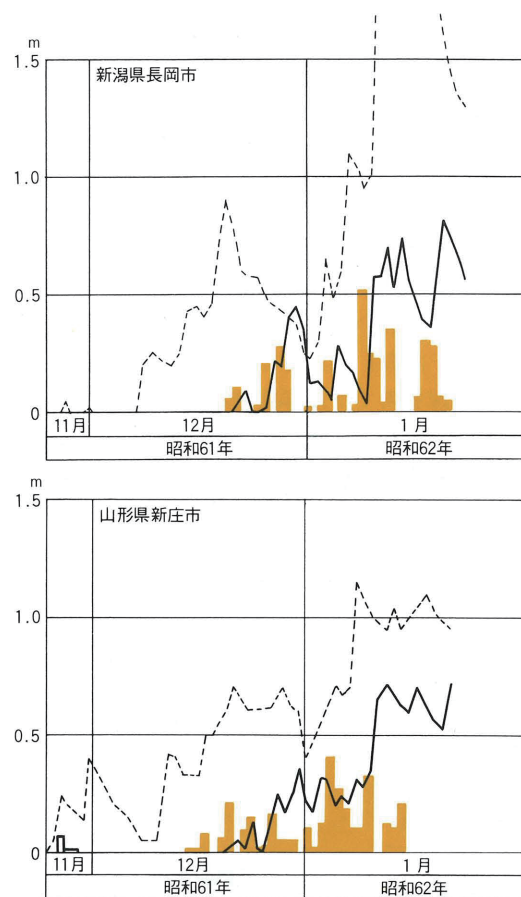
上記の地震活動図は 2 面 (図 3) に掲載。伊豆大島周辺では、北西及び南方沖で地震活動が見られる。長野県西部では、昭和 59 年の余震が依然として続いている。長野県北部では、昭和 61 年 12 月 30 日の地震の余震があり、その東部でもやや

まとまった活動が認められる。

本号から、各月別地震活動を 4 面に掲載いたします。

今冬は寡雪か？

昨年の豪雪に比べ、今までの所、今冬は寡雪傾向。雪が降っても連続して多く降ることはなく、積雪深は例年の約 2 分の 1 (下図参照)。



新潟県長岡市と山形県新庄市における今冬前半の降雪深及び積雪深 (■は降雪深、実線は積雪深、点線は昨年同期の積雪深)

〔訂正〕

前号 No. 1, 2 面の図 2 及び 3 面の図 4 の北、西方向下りは北、東方向下りの誤りでした。

編集兼 国立防災科学技術センター企画課
発行 〒305 茨城県新治郡桜村天王台 3-1
TEL (0298) 51-1611 (代)